リレーエッセイ

若者へのメッセージ㊷

漫画家　竹宮　惠子

【第二回】夢への最短距離を構築する

夢を語るとき、人は目標を思い浮かべる。はっきりした形が思い浮かぶなら上出来だ。そこに至る道も見えやすいはず。だが、道を全く想像せず夢が叶(かな)うと考えているなら「それは妄想に過ぎない」と、多くの成功者が言うだろう。目標への道は、自分自身で必ず構築しなければならない。

マンガを創り始める

漫画家を自分の夢と設定したのは中学2年ごろだったかと思う。

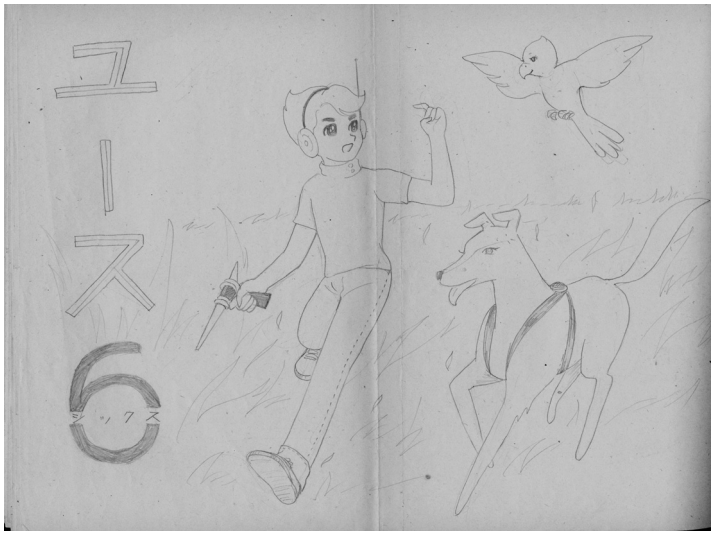
それまでは、自分がなりたいものを列挙する子ども時代の遊びの中で、「看護師さん」「パイロット」「お母さん」「お医者さん」等々、一般的な理想を列挙していた。お絵描き遊びから始まった「マンガというものの形」にすっかり夢中になった私は、皆が似顔絵描きの遊びから離れてしまってもマンガの絵を描くことから離れられなくなった。

ただ描き散らかすだけではなく、描く絵に意味を持たせたくて、わざわざ台紙が白いアルバムを選んで写真を貼り、マンガ絵のキャラクターを添えて吹き出し（セリフ用バルーン）もつけ、写真の説明をさせた。

自分の描いたキャラクターがしゃべり、写真の案内をするという用を果たすことこそが、私の関心だったのだ。マンガの似顔絵を描くことも、もう通常のこと（似顔絵レベル）では満足できず、マンガのページを丸ごとコマそのものから書き文字や吹き出しに至るまで、同じサイズに描き写そうとした。まあ、中2の自分には無謀な試みだったという他はないけれど……。

マンガに対しての欲がそんなレベル？まで来ていた私は、当然、次の段階に入り、コマを割ってオリジナルのマンガを創り始める。高校の進路面談で、私は親にではなく担任教師に漫画家という「夢」を明かした。

私にとってマンガは親以外の大人を意識させてくれるもので、だから親以外の大人である担任に話すことに意味があった。もちろん、頭ご



筆者が中学時代に描いた鉛筆マンガ

なしに反対を唱える大人ではないと信じてもいた。担任はその時、私がすでに未来へのプランを持っていることを、むしろ褒めてくれた。進路について両親を説得するための足がかりに十分だと思い、浮き立つ気持ちになったことを記憶している。

東京攻略

次に「夢」というラベルをこの「漫画家をめざす」という行為につけるには「東京攻略」のビジョンが必要だと思い始める。東京は当時、印刷出版の会社が集まる場所で、どんなに微(かす)かでもいいからそこで自分の存在を認められることが、夢の確信につながるだろうと考えた。

あまたの先達も、私が漫画家として目標としてきた石ノ森章太郎先生も、地方から東京を目指した時代。地方から中央を目指すには、交通の便や経済的理由で「投稿」という形に絞られる。

デビューから３年、スランプの頃の筆者

生原稿を入れた封筒を掻(か)き抱いて、無事に届くかどうか知れないポストに投函するのには渾(こん)身の勇気が要った。その後、同人誌や投稿作を通じて、東京の出版社から新人として関心を持ってくれているらしい由の連絡が入るようになる。そして「試しに連載を」という幸運へとつながった。自分が描いてきた作品が編集者や読者を説得し、それをまた別の編集者が知るのだということが、どれほどの広がりを持っているのか、その頃の私にはまだ十分理解できていなかった。

失敗や努力の必要性

「夢」は次の可能性だけでなく、失敗や努力の必要性をいやおうなく突きつける。何回かの連載や読み切りを経験し、その結果の危なっかしさを感じたり、もう取り返しがつかないことに気づいたりするのだ。

既に業界入りしている自分の次のステップが見えづらく、現実ばかりが追いすがってきて、何を手に入れれば次へ向かえるのかわからなくなってしまった。そして始まるのは自分の立ち位置を決める戦い。アイデンティティーを獲得することと言ってもいいかもしれない。自分は業界にどのような形で立っているのか。そしてどちらの方向を向き、どういう到達点をめざすのか。

その獲得に至るまでを説明するには、また別に長く書かねばならないが、何より言っておきたい大事なことは、「夢とはかくも長く遠いもの」だということ。夢の大きさを小さく設定すれば叶えて終了することは可能だが、大きく設定して次へ行くのなら、さらに高い位置をめざしてジャンプアップしなければならない。むろん設計もやり直しを迫られる。

その奥行きがある夢こそ、自分を再び奮い立たせ、新たな努力と成長を自分にもたらしてくれる。ぞっとするような恐れも、どうしていいかわからないほどの困惑も、解決してみればいとおしい。

夢への旅路でアイデンティティーを獲得しようと格闘して、さらに傷つき悩み込み、夢を断念する若者は数多い。自分と相対する恐ろしさを思えば、夢を捨てるほうが楽なのか。それでも他からふいに立ち直れない傷を受けるより、自ら進んで傷を得るほうが痛くない、とは思えないだろうか。

自分が何者かを自分の手でつかみ、悪びれず他者にそれを表明し、高くも低くもない妥当な評価を自分に対して持つ。それは自分を愛することの始まりでもある。